

## 岐阜米穀(株) メールマガジン

### 今回のテーマは「粗飼料自給 100% 農機で効率化」

群馬県嬭恋村で酪農を営む横沢宏一さん（63）は、高い標高の冷涼な気候を生かして粗飼料を 100%自給し、飼料費を削減している。

飼料作物の栽培では、馬力やアタッチメントが異なる複数のトラクターを作業ごとに使い分けて効率を向上。豊富な粗飼料を生かして育成牛も自ら飼育し、預託にかかる費用も削減する。

横沢さんは成牛 37 頭、育成牛 24 頭を飼育する。年平均気温が 10 度以下という同村の気候を生かし、冷涼な気候が向く牧草のチモシーを 12 ヘクタール栽培。6 ヘクタールのリードカナリーグラスも合わせて、牛に与える分を全て自前で賄う。輸入乾牧草の高騰もあり、飼料費は全て購入した場合に比べ 3 分の 2 程度と「削減効果は大きい」という。

チモシーは 6、8 月の 2 回、リードカナリーグラスは 6、8、10 月の 3 回刈り取る。直径 140 センチのロールを年間 500~600 個生産。牛舎のある自宅敷地内で保管し、鳥獣害から守る。刈り取りの際に長さ約 13 センチに切ることで牛に与えやすくしている。元々はサイレージにするデントコーンも栽培していたが、労力削減やイノシシによる獣害被害を避けるため、7 年ほど前に全て牧草に切り替えた。

牧草の作業は、180 馬力の大型機など計 7 台のトラクターに、カッティングロールベアラーやモアコンディショナーなどのアタッチメントをそれぞれ装着。専用機として作業工程ごとに使い分け、アタッチメントを付け替える時間を削減する。勤め先を定年退職した弟も作業を手伝うが、昨年までは 18 ヘクタール分の作業を一人でこなしていた。この他、自動給餌機やレール付きのミルクカーも導入する。

離農した酪農家などから引き受けた畑も多いが、全ての畑がトラクターで 5 分以内の場所にあることで移動時間も少なく済む。「砂地で石が多くても牧草なら栽培できる」という。育成牛も自前の粗飼料で飼う。成牛になるまで北海道などの牧場に預ける預託を行わないことで、運搬や預け入れにかかる費用を抑える。また自らの牧場で育成期間を過ごすことで、それぞれの牛の性格などが把握でき、搾乳などの作業をスムーズに出来るという。牛

ふんを堆肥にして畑にまき、資源循環も実践する。横沢さんは飼料の自給について「機械は高いが餌も高い。ただ機械は餌と違って次の年も使える」と、考え方を話す。